様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４４１４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０７２４

研究課題名（和文）検索語彙の定着を目指した電子辞書方略指導の研究

研究課題名（英文）Enhancing learners' E-dictionary skills through strategy training

研究代表者
小山　敏子（Koyama, Toshiko）

大阪大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：２０３５２９７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円、（間接経費）　　840,000円

研究成果の概要（和文）：大学生を対象とした辞書使用方略訓練を複数の実践で検証した結果、一定期間（10週間以上）明示的な指導とともに、学習者が自発的に辞書を活用する環境を設定すると方略は定着し学習効果が得られた。次に、英語初習者に対する調査では、辞書の引き方を習った中学生はその内容を覚えており、その指導が役に立つと考えていることがわかった。最後に、デジタル辞書のインターフェイスデザインを検討するために行ったスマホ辞書と電子辞書の比較研究では、現在のところ、両辞書間での検索行動や学習効果に際立った差は見られないが、スマホ辞書の利便性を肯定しつつも、学習ツールとしては電子辞書を支持する大学生が多いということが判明した。

研究成果の概要（英文）：Study 1: A series of experiments, attempted to clarify how effective strategy training with pocket electronic dictionaries (henceforth E-dictionary) has been in an L2 reading class. The participants were provided with an explicit presentation of strategies and metacognitive tasks with peer review, found that their reference skills had improved for over a 10-week training period. The strategies were well-retained and contributed to their reading comprehension as well as vocabulary acquisition. Study 2: A survey of E-J dictionary use among Japanese JHS students. The participants found the dictionary look-up training worthwhile. Study 3: Conducted with the smartphone dictionary apps and the E-dictionary to examine suitable interface designs. Although the learners highly evaluate the ease of smartphone apps, they regard the E-dictionary as a desirable educational tool.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：電子辞書　検索行動　スマホ辞書　辞書使用方略　MALL

１．研究開始当初の背景

(1) 昨今の英語教授法（たとえば、辞書を必要としない Extensive Reading、コミュニケーション重視の英語教育など）の影響から辞書指導が軽視されていることは否めないが、学習辞書から適切な言語情報を得ることは、自律した英語学習者を育成するために極めて重要である。そして、辞書を正確に引くには複雑な認知的スキルが必要となるため、学習者への適切な指導が欠かせない。

(2) 印刷辞書に比べ携帯性を重視する携帯型電子辞書（以下、電子辞書）は一覧性に欠けるため、習熟度が十分でない学習者が、必要な言語情報を入手していると錯覚する傾向も見られる。こうした課題とともに、初めて手にした辞書が「電子辞書」である学習者が急増している現在では、英語教育現場に、適切な辞書指導法の提言や辞書指導に適した教材の提供が急務である。

(3) モバイルテクノロジーを代表し、大学レベルの英語学習者の所有率が極めて高いスマートフォン辞書アプリ（以下、スマホ辞書）の可能性を検討する必要がある。

２．研究の目的

(1) 英語学習者から圧倒的な支持を受けている電子辞書を使い、大学生を対象に、英語習熟度にも配慮しながら、１）英文読解時の辞書使用方略（strategy）の確実な定着と、２）辞書検索語彙の定着率向上をめざし、適切な指導法を検討した。

(2) (1)の調査過程において、英語初習期の学習者が辞書指導をどのように受け止め、またその内容を覚えているかについて中学生を対象に調査した。

(3) 英語学習に望ましいデジタル辞書のインターフェースデザインを検討するため、スマホ辞書と電子辞書の比較研究を、大学生を対象に行った。

３．研究の方法

(1) 大学の Reading のクラスにおいて辞書指導を行い、１）教授した辞書使用方略がどの程度定着するか、２）学習者の辞書検索行動に対する意識に変化があるか、３）その結果、方略を使用すると検索語彙の定着率が向上するか、を中心に調べた。異なる英語習熟度の参加者を対象に、異なる実施期間で複数回行った研究では、メタ認知をより活性化させるタスクを設定した。このタスクでは、未知語を中心に、ワークシートに検索語彙とその語彙情報を記載するよう指導した。また、辞書検索行動のあと、学習者同士が課題について自由に相談し、かつ、お互いが辞書を使って再度確認できるような学習環境を設定した。

(2) 辞書指導に関する質問紙を作成し、中学生を対象に調査した。

(3) 研究参加者が普段利用している電子辞書と同じコンテンツが入ったスマホ版辞書を使って英文を読むタスクを課した。そして、電子辞書を使った場合と、１）検索時間、２）検索語数、３）1 週間後の検索語の再認率、４）学習者の辞書への印象、などの比較を行った。

４．研究成果

(1) 大学生対象の辞書使用方略の研究

①習熟度が中級レベルの学部生 15 名を対象に、辞書使用方略訓練を 10 週間程度行ったところ、１）検索語彙の定着率は向上し、２）辞書使用方略も定着することがわかった。また、３）学習者の辞書使用に関する意識向上も見られた。しかしながら、辞書方略指導に使った英文テキストの読解力については、pre-、post-tests 間で変化がなく、これまでに得られた知見とは違うものとなった。一方で、本実践の前後で望月語彙サイズテストを実施したところ、この辞書指導のみならず他の学習要素に起因していることも考えられるものの、被験者らの語彙サイズは有意に向上したこともわかった。

② ①の実証研究の内容をさらに発展させ、メタ認知活動を加えた辞書使用方略指導の定着を、１）辞書学習者の意識、２）検索行動、の運用の両面からより正確に測定することを目指した本研究は、中級レベルの学部生 17 名を対象に 13 週間行った。読解用のテキストを学習する際、１）積極的に辞書を使うことを奨励し、２）特に多義語が含まれた部分を取り上げ、辞書検索方法を意識的に教授した。その上で、３）参加者が自ら英文テキストのユニットを選び、内容を解説するような活動を行った。同時に、４）自宅学習として、未知語を中心に品詞を含む語彙の定義、用例やイディオムなどを記録するよう指導した。この効果を検証するため、研究期間の最初と最後に、多義語が含まれた複数の英文で構成された小テストを各自の電子辞書を使って解答させるとともに、各自がとった辞書検索行動を尋ねる質問紙を配付した。結果として、検索語彙、辞書使用方略の両方に有意差が確認された。つまり、方略指導においては、学習者が主体的に辞書を活用する機会を与えることが学習効果をもたらすことを示唆している。

③ ①、②とは習熟度の異なった学習者（初中級レベル 12 名）を対象とした本研究は、約 10 週間かけて行われた。①、②と同様に方略指導と同時にワークシート記入を奨励した。pre-、post-tests の結果から、１）訓練後に、辞書から適切な言語情報を引き出すスキル（語彙レベル）は向上したが、２）方略

指導内容の定着率や検索語彙の再認率においては、向上は見られるものの、統計的に有意差は確認されなかった。

④ 本研究では、辞書指導にあたり電子辞書の画面を、プロジェクタを使って教室内に投影し、辞書の内容を説明した。また、電子辞書ならではの機能（単語登録機能）が、辞書使用にあたりどの程度、英語学習者にとって有効かを調べた。対象者は①の研究に参加した中級レベルの大学生 15 名で、辞書検索語彙を必ず電子辞書に登録し、その日に必ず見直すように指導した。9 週間の辞書使用方略訓練後の delayed-post test の結果、辞書から適切な言語情報を引き出すスキル（語彙レベル）は確実に向上し、訓練終了後も教授した辞書方略が定着していることが判明した。

⑤ 研究期間最後の本研究は、英語習熟度が比較的低い学習者（False-beginner）を対象とした。これまでと同様に、メタ認知活動を加えた辞書使用方略指導の定着を、１）辞書学習者の意識、２）検索行動、の両面から調べた。大学学部 1 回生 20 名を対象に約 6 ヶ月間の訓練を行った。訓練では、読解用のテキストを学習する際、１）積極的に辞書を使うことを奨励し、２）特に多義語が含まれた部分を取り上げ、辞書使用方略を意識的に教授した。その上で、３）参加者が自発的に担当を決め、内容を解説するような活動を行った。同時に、４）自宅学習として、未知語を中心に品詞を含む語彙の定義や用例やイディオムなどを記録するよう指導した。結果として、辞書使用方略の定着には際だった差が見られなかったが、参加者の自由記述から、こうした辞書方略訓練によって、学習者が主体的に辞書を活用するようになることが示唆された。

(2) 学習者が英語初習期に受けた辞書指導をどのように受け止めているか、また受けた指導をどの程覚えているのかについて調査するため、10 項目の質問紙を 6 校に在籍する中学生 559 名に配布した。その結果、ほぼ全員が自分専用の英和辞典を所有していることがわかったが、その辞書を積極的に活用している生徒たちは半数程度であった。また、電子辞書を所有している生徒が全体の 3 割程度いることが判明した。次に、「辞書指導を受けたことがある」と答えた生徒のうち、90% 近くが「その指導は役に立った」と回答している。指導過程で英語日誌作成や、各校の取り組みの英語カレンダーやカード作りはグループワークとしたため、生徒同士が助け合い、話し合いながら辞書を引き、作品を仕上げていったことが推測される。以上のことから、中学校における外国語（英語）学習には、１）教科書の内容に応じたレベルの（学習者の習熟度に合った）辞書を持たせ、２）まず、辞書の使い方を教え、３）最初のうちは、指導者が辞書を引く活動を設定する。やがて、４）学習者らが自発的に辞書を活用するような環境作りを行い、５）必要に応じて、学習者同士が助け合える場を設け、６）個々人の辞書利用に対する疑問にも指導者が適切に対応していくことが望ましいと考えられる。

(3) デジタル辞書の望ましいインターフェースを検討するため行った研究は、現在も進行中であるが、現時点で得られた知見を報告した。すなわち、スマホ辞書を使った時の方が、辞書検索を含めた解答時間は長くかかったが、英語問題の正答率に差は見られなかった。また、インターフェースに対する学習者の意見を詳しく調べるため、アンケートへの回答をもとに、個別にインタビュー調査を行った結果、スマホ辞書の利便性に対する意見は多かったものの、学習ツールとしては、電子辞書を支持する意見が大半を占めた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 小山 敏子、中学生の英語辞書使用の実態調査、大阪大谷大学紀要、査読無、第 48 号、2014、23-31

② Koyama, T. Enhancing learners' E-dictionary skills through strategy training. *Selected papers from the 8th ASIALEX International Conference*, 査読有, 2013, 173-178.

③ 小山 敏子、実証データが語るもの -外国語教育における電子辞書-、フランス語学研究、査読無、第 47 号、2013、55-57.

④ 小山敏子、薮越知子、電子辞書使用の方略指導への一考察 -メタ認知活動を取り入れて-、外国語教育メディア学会（LET）関西支部研究集録、査読有、第 13 号、2011、79-87

〔学会発表〕（計１５件）

① Koyama, T. Comparing Smartphone dictionary apps and E-dictionary: How the difference affected EFL learning, The GLoCALL 2013 Conference at The University of Danang, Vietnam, November 30, 2013

② Koyama, T. How the mobile technologies affect pedagogical environments?: Smart-phone dictionary apps vs. hand-held dictionaries EUROCALL 2013 Conference at University of Evora, Portugal, September 13, 2013

③ 小山 敏子、電子辞書の方略指導の効果 The 52nd JACET International Conference 於 京都大学、2013 年 8 月 30 日

④ Koyama, T. Enhancing learners' E-dictionary skills through strategy training The 8th ASIALEX International Conference

at Dynasty Resort, Bali, Indonesia, August 20, 2013

⑤ 小山 敏子、スマホ版辞書の可能性：電子辞書との比較において　外国語教育メディア学会 (LET) 第53回全国研究大会　於：文京学院大学本郷キャンパス、2013年8月9日

⑥ Koyama, T. How technology contributes to L2 learners' look-ups? WorldCALL2013 at Scottish Exhibition & Conference Centre, Glasgow, UK, July 11, 2013

⑦ Koyama, T. The Efficacy of E-dictionary Strategy Training with Metacognitive Tasks for Japanese EFL Learners The GLoCALL 2012 Conference at Beijing Foreign Studies University, China, October 18, 2012

⑧ Koyama, T. How does E-dictionary strategy training help EFL learners' vocabulary acquisition? The 51st JACET International Conference at Aichi Kyoiku University, September 1, 2012

⑨ Koyama, T. Pedagogical changes brought about by technological innovation: Enhancing learners' E-dictionary skills through strategy training. EUROCALL 2012 Conference at University of Gothenburg, Sweden, August 24, 2012

⑩ 小山 敏子、電子辞書方略指導：定着をどう測るか　外国語教育メディア学会 (LET) 第52回全国研究大会　於：甲南大学岡本キャンパス、2012年8月9日

⑪ 小山 敏子、フランス語教育と電子辞書日本フランス語学会シンポジウム　於東京大学本郷キャンパス、2012年6月2日

⑫ Koyama, T. How Technological Innovation has Changed Pedagogical Environments: Some Empirical Studies on the use of E-dictionary, The 15th International CALL Research Conference at Providence University, Taichung, Taiwan, May 25, 2012

⑬ Koyama, T. How does E-dictionary help EFL learners' vocabulary acquisition? The GLoCALL 2011 Conference at Century Park Hotel, Manila, The Philippines, October 29, 2011

⑭ Koyama, T. Effect of strategy training for the use of E-dictionary in EFL context The 16th World Congress of Applied Linguistics (AILA2011) at Beijing Foreign Studies University, China, August 25, 2011

⑮ 小山 敏子、メタ認知を活性化させる電子辞書方略指導の試み　外国語教育メディア学会 (LET) 第51回全国研究大会　於：名古屋学院大学名古屋キャンパス、2011年8月7日

〔その他〕

ホームページ等

http://www.osaka-ohtani.ac.jp/

６．研究組織

(1)研究代表者

小山　敏子（KOYAMA, Toshiko）
大阪大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：２０３５２９７４

(3)連携研究者

望月　正道（MOCHIZUKI, Masamichi ）
麗澤大学・外国語学部・教授
研究者番号：９０２４５２７５